KANAGAWA UNIVERSITY
Magazine

PROUD BLUE

04
2017/03

特集

冒険家と名探偵

巻頭インタビュー

ジェームズ・ウェルカー 准教授

外国語学部 国際文化交流学科
日本近代文化史、
ジェンダー・セクシュアリティ、
グローバリゼーション

インタビュー

小馬 徹 教授

人間科学部 人間科学科
文化人類学

廣田 律子 教授

経営学部 国際経営学科
少数民族・ヤオ族研究

孫 安石 教授

外国語学部 中国語学科
中国近代史、上海都市史、
東アジア租界史

特別インタビュー

諸田 實 名誉教授

西洋経済史

CONTENTS

p.03-11
FEATURE
特集
冒険家と名探偵

p.03-05
ポップカルチャーから
読み解く、
日本の女性と自由
ジェームズ・ウェルカー准教授
外国語学部　国際文化交流学科
日本近代文化史、
ジェンダー・セクシュアリティ、
グローバリゼーション

p.06-07
最も遠い、
最も異なった土地へ
小馬 徹教授
人間科学部　人間科学科
文化人類学

p.08-09
国境を越え、時空を旅する。
少数民族・ヤオ族に見る、
文字の力
廣田 律子教授
経営学部　国際経営学科
少数民族・ヤオ族研究

p.10-11
国際都市・上海から読み解く
グローバル超大国・
中国を支えたもの
孫 安石教授
外国語学部　中国語学科
中国近代史、上海都市史、東アジア租界史

p.12
LABS
研究所紹介 日本常民文化研究所

p.13
A NEW HOPE
〜注目の若手研究者〜
楊 洲
博士後期課程１年
外国語学研究科
中国言語文化専攻

p.14-15
INTERVIEW:ECONOMY INSIGHTS
フッガーとリスト。
ドイツ経済史の巨人を追って
諸田 實名誉教授
西洋経済史

PROUD BLUE FOURTH ISSUE:

冒険家と名探偵

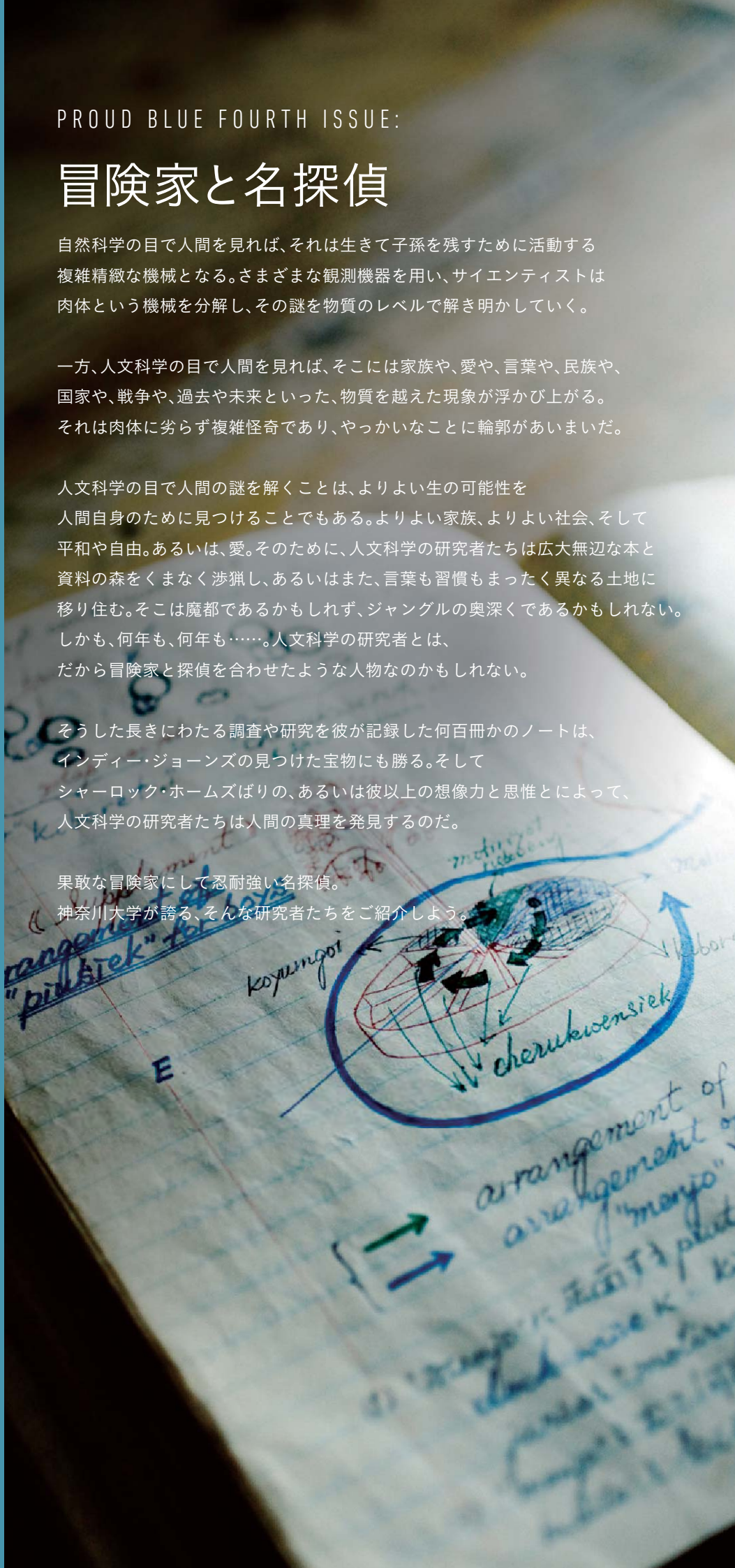
自然科学の目で人間を見れば、それは生きて子孫を残すために活動する
複雑精緻な機械となる。さまざまな観測機器を用い、サイエンティストは
肉体という機械を分解し、その謎を物質のレベルで解き明かしていく。

一方、人文科学の目で人間を見れば、そこには家族や、愛や、言葉や、民族や、
国家や、戦争や、過去や未来といった、物質を越えた現象が浮かび上がる。
それは肉体に劣らず複雑怪奇であり、やっかいなことに輪郭があいまいだ。

人文科学の目で人間の謎を解くことは、よりよい生の可能性を
人間自身のために見つけることでもある。よりよい家族、よりよい社会、そして
平和や自由。あるいは、愛。そのために、人文科学の研究者たちは広大無辺な本と
資料の森をくまなく渉猟し、あるいはまた、言葉も習慣もまったく異なる土地に
移り住む。そこは魔都であるかもしれず、ジャングルの奥深くであるかもしれない。
しかも、何年も、何年も……。人文科学の研究者とは、
だから冒険家と探偵を合わせたような人物なのかもしれない。

そうした長きにわたる調査や研究を彼が記録した何百冊かのノートは、
インディー・ジョーンズの見つけた宝物にも勝る。そして
シャーロック・ホームズばりの、あるいは彼以上の想像力と思惟とによって、
人文科学の研究者たちは人間の真理を発見するのだ。

果敢な冒険家にして忍耐強い名探偵。
神奈川大学が誇る、そんな研究者たちをご紹介しよう。



FEATURE

ポップカルチャーから読み解く、日本の女性と自由

研究室の本棚には、大きな瞳で微笑む女の子がカバーを飾る少女マンガ、少年同士の同性愛を描いた「ボーイズラブ（BL）」の同人誌が並ぶ。アメリカ・オハイオ州出身の研究者、ジェームズ・ウェルカーは、この研究室で日本のジェンダー・セクシュアリティを研究する。少女マンガやボーイズラブなどの日本独自のポップカルチャーは、女性による、女性のための自由を求める戦いの中で生まれたのだ。

ジェームズ・ウェルカー
准教授
外国語学部
国際文化交流学科

日本近代文化史、ジェンダー・セクシュアリティ、グローバリゼーション

日本のジェンダーは輸入品ではない

「私は日本のウーマンリブ、レズビアンコミュニティ、そして少年愛を描いた少女マンガの歴史的な関係性に注目し、研究を始めました。これらは1970〜80年代に生まれた、日本のジェンダー・セクシュアリティの形成に深く関連したムーブメントであり、コミュニティであり、ポップカルチャーでした。私はアメリカなどの西洋文化との交流を着眼点としながらそれらを研究しています」とウェルカーは話す。

日本のウーマンリブも少女マンガも、単に西洋の文化を“輸入”し、模倣したものではない。抑圧的な男性社会の中に生きる日本の女性たちは、自らの社会的地位を刷新するために、西洋の文化を採り入れながら、独自の文化を生み出してきたのだ。

ウェルカーはそうした西洋文化との交流を説明するとき、“transfiguration（トランスフィギュレーション：変容・変貌・変化の意）”という言葉を用いる。

「西洋の文化がどのように変容・変貌・変化（トランスフィギュア）されていったかを研究することが、日本のジェンダー・セクシュアリティ、そして今の女性が置かれている社会的状況を考察する手がかりを与えてくれるのです」

愛の自由を求め生まれた少年愛

日本のマンガ・小説に、男性同士の恋愛をテーマにした独自の作品ジャンル、ボーイズラブがある。読者にはゲイの男性が多いと思われるかもしれないが、読者も作者もほとんどが女性なのだ。この背景には、ボーイズラブの原型である70年代の少女マンガにおける「少年愛」が、女性の恋愛・性愛表現の自由を獲得するために生まれたという経緯があるのだという。

「少年愛は、少女マンガ家が女性のセクシュアリティに関する規範を回避し、自由な恋愛を描くために生まれたものです。竹宮惠子は、少年愛の金字塔『風と木の詩』を描いたことで知られていますが、彼女の作品は少女や女性に対するジェンダーとセクシュアリティの

『The Hite Report』。性体験や、セックスにおける女性の従属的な役割に対する意見など、アメリカ人女性3000人のリアルな声を集めた書。

『Our Bodies, Ourselves』(左)。フェミニズムが高まりを見せていた1969年にアメリカ・ボストンのエマニュエル大学で女性活動家たちが開いたワークショップから生まれた書。彼女らが自らの身体についての経験を、医師と共有し議論したものが商業出版された。日本において同書はさまざまに翻訳され、今も読み継がれている(右)。

研究室の本棚には、マンガの単行本に雑誌、同人誌までがずらりと並ぶ。

17歳で『リンゴの罪』でマンガ家デビューした竹宮惠子。代表作は『風と木の詩』、『ファラオの墓』、『地球へ…』など。現在、京都精華大学で学長をつとめる。

規範への抵抗の産物だと言えます。同作が発表された70年代の日本では家父長制が強く、女性は社会において強く抑圧されていました。恋愛やセックスを描く場合、例えそれが男女間のものであったとしても、女性は受身であるという規範に制約を受けます。しかし、それを男性同士の恋愛として描くことで、この問題が回避できる。こうして少年愛というマンガ表現を生み出したのです」

『風と木の詩』は、19世紀後半の南フランスの全寮制の学校を舞台に繰り広げられる物語だ。ウェルカーはこの舞台設定に、ヘルマン・ヘッセの作品やルキノ・ヴィスコンティの『ベニスに死す』(トーマス・マン原作)などの世界のトランスフィギュレーションを見出す。「当時の日本は性の自由をヨーロッパ的世界観に求めていたのです」とウェルカーは話す。

また竹宮が、西洋に性の自由を見出すきっかけのひとつとなったのは、『一千一秒物語』などの作品で知られる稲垣足穂なのだという。この足穂こそが「少年愛」という言葉を最初に用いた小説家だった。足穂は少年愛を主題としてエロティシズムを論じた随筆『少年愛の美学』を1968年に刊行し、少年愛を描くマンガ家に大きな影響を与えた。

少年愛はその後、読者による少年愛マンガの二次創作「やおい文化」を育み、現在のボーイズラブを扱うマンガや小説などを生み出す。ボーイズラブという言葉は、とあるマンガ雑誌のキャッチコピーに用いられたものだったが、現在は「boys love」や「yaoi」、「shounen-ai」として、さまざまな言語に翻訳され、世界中で読者を獲得するコミックのジャンルになっている。

「最近では、アジア諸地域におけるボーイズラブのコミック、小説、実写映画などに関心があります。2017年7月には、東アジアをはじめ、東南アジアや南アジアの国々におけるボーイズラブメディアの研究者を招聘し、神奈川大学でのシンポジウムを企画しています。そして、その成果を英語の論文集としてまとめる予定です」

自由は言葉に始まる

女性解放運動におけるトランスフィギュレーションを読み解く上で重要な資料になるものが、海外出版物の翻訳だ。

SIDE STORIES

「ボーイズラブ」ネーミングは雑誌のコピー

「ボーイズラブ」という言葉を最初に使ったのは、白夜書房発行の雑誌『イマージュ』のコピーだった。雑誌タイトルの上に「BOY'S LOVE♥ COMIC」と書かれている。

少年愛に影響を与えた映画の中の美少年

少年愛マンガ家に、映画が与えた影響は大きい。たとえば映画『悲しみの天使』は萩尾望都の『トーマの心臓』に、映画『ベニスに死す』は竹宮惠子の世界観に、影響を与えているとされる。

1970年代には、日本の女性解放運動であるウーマンリブ運動が起こる。そのきっかけの一つは、1960年代末に全国でさかんになった学生運動「全共闘運動」だった。街頭デモなどに参加するのは男子学生に限られ、女子学生は大学で「おにぎりづくり」に従事させられるという屈辱的な出来事が引き金となり、日本の女性を抑圧から解放すべくウーマンリブ運動の機運が高まったのだ。

この時、海外で読まれていた女性解放運動のバイブルの数々が日本語に翻訳され、紹介される。その先駆けが1971年にアメリカで出版された『Our Bodies, Ourselves』(邦題『女のからだ ー 性と愛の真実』）だ。女性器、月経、妊娠などのトピックが並び、女性の身体を生理学的に明らかにしている。

「この本の改訂版が1988年に『からだ・私たち自身』というタイトルで新たに翻訳されましたが、その過程で、翻訳者が女性のために新しい日本語をつくりました。従来から用いられていた中国由来の日本語は、女性の身体部分に羞恥的で否定的なイメージを与えており、女性が人前で話すことを妨げていたからです。たとえば女性的な意味を持つ『看護婦』に代わって、中立的な『看護士』(現在では『看護師』）という言葉が用いられたのもこの時です」

さらに1976年には、アメリカの3000人の女性を対象とし、性の実態を取材したシェア・ハイトによる『ハイト・リポート』が注目を集め、日本のレズビアンコミュニティに影響を与えた。日本でも1987年に女性を愛する女性・レズビアン234人を、『ハイト・リポート』同様に取材・調査した『女を愛する女たちの物語』が出版される。これは日本で初めてレズビアン目線による、レズビアンのための言葉を本にしたものだと考えられている。

「この本は『ハイト・リポート』のトランスフィギュレーションだと僕は考えてます。日本人は、ただ『ハイト・リポート』を輸入しただけではなく、その調査方法を生かし、独自の表現をつくりあげたのです」

女性の自由はまだ遠い

こうした様々な試みの中で、女性はどれだけ自由になったのだろうか？　ウェルカーは「女性が自らの性のことを多少は話しやすくなった」としつつも、「日本の女性はまだ社会的に自由になっていない」と話す。

「日本の国会議員、メディアに登場するコメンテーター、影響力のある人物も依然としてほとんどが男性です。テレビで男性が少し卑猥な発言をしても咎められないけれど、女性は許されない。なぜ許されないのか。あなたには答えられますか？」

ウェルカーは、アーティストのろくでなし子（五十嵐恵）が逮捕された事件にも、強い女性への抑圧を感じるという。同氏は女性器を表現媒体として様々な作品を発表した結果、2014年７月、わいせつ電磁的記録等送信頒布の罪に問われた。

「女性解放運動に関する本や、少年愛マンガが教えてくれるのは、日本の女性の、自由のための戦い方なのです。作家や翻訳家たちは、最初は西洋文化の自由に憧れて、それらを採り入れようとしたのかもしれない。しかし、彼女らはそれを自分の武器にし、戦うことを選んだのです。ただ憧れるだけではなく、この国で、自分たちの自由を手にするために」

James Welker
アメリカ合衆国オハイオ州生まれ。イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校大学院 博士課程修了。博士（東アジア言語文化）。城西国際大学ジェンダー・女性学研究所客員研究員、ブリティッシュコロンビア大学アジア学科ポストドクター等を経て、現在、神奈川大学外国語学部国際文化交流学科准教授。

FEATURE

最も遠い、最も異なった土地へ

アフリカでの38年に及ぶフィールドワーク。
そこには植民地化、そして近代化の荒波に翻弄され続ける人々がいた。
彼らは元来文字を持たず、統治者を持たなかった。
人類学者・小馬徹は彼らに何を探し求め、何を見出したのか。

小馬 徹教授
人間科学部
人間科学科
文化人類学

解体される日本人という「私」

19世紀中頃までは世界の秘境と呼ばれたそこで、小馬は31歳だった1979年からほぼ年に一度のペースで参与観察調査、つまり人々と暮らしを共にするフィールドワークをおこなってきた。38年間、長いときで8～9ヵ月、短いときでも1～2ヵ月を費やしてきたその土地は、東アフリカのケニアの奥地にある。アフリカ大地溝帯と呼ばれ、大陸を東西に切り裂く巨大な谷が南北に縦断するそこには、南ナイル語系のカレンジン語を話す民族の一つであるキプシギス人が暮らす。

「人類学者を志した学生の頃から、自分から最も遠い、最も異なった土地、アフリカに行くんだと心に決めていましたね。そのためにスワヒリ語も一生懸命独学しました」

キプシギス人の調査に派遣されることになったのは、一つにはそのスワヒリ語の力を小馬の一橋大大学院時代の恩師、長島信弘氏に買われたからだ。長島氏はオックスフォード大学で社会人類学を学び、そのフィールドワークの中心地の一つ東アフリカで、この学問の発展の一翼を担う研究活動を精力的におこなっていた。長島氏は、スワヒリ語が使える小馬に、カレンジン諸民族という新たなフロンティアの開拓を託したのだ。

「“フィールドワークは、するよりも始めるほうがもっと難しい”と言われるのですが、まさにその通りで、ナイロビからキプシギス人の暮らす村にバスで二日かけてなんとかたどり着き、そこで住む場所を見つけ、暮らし始めるまでが実にたいへんでした。そこでは、日本人という『私』が木っ端みじんに解体されましたね。ゼロから新しい『私』をつくりあげ、その社会の構成員の一人にならなければいけないんです」

混沌の中に一筋のつながりを見出す

キプシギス人が、自分たちははるか昔にエジプトから南下して来たと語るように、その言語はケニアの他の民族とは大きく異なっている。体つきも細身だ。牛を重要な財物として扱い、ときにその牛が貨幣のような役割も果たす独特の文化を持つ。そして、彼らは文

Toru Komma
1948年、富山県生まれ。一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了。博士（社会人類学）。神奈川大学外国語学部教授などを経て、現在同人間科学部教授。『川の記憶』（田主丸町誌第1巻）（共著、第51回毎日出版文化賞受賞、第56回西日本文化賞受賞、1996年）、『フィールドワーク事始め』（御茶の水書房、2016年）、『文化を折り返す』（青娥書房、2016年）ほか著書多数。

字を持たなかった。つまり無文字文化なのである。そんな彼らの社会で、小馬は38年間、地を這うようにして綿密な調査をしてきた。小馬の小屋には深夜でも「車で病院に連れて行ってくれ」と地元民がやって来た。そんなふうに暮らしの万端を共にしながら、キプシギス人のまさにすべてを観察し、記録する。やがて膨大なディテールの山が築かれる。その無数の断片からなる巨大な混沌の中に、一筋の必然的なつながりを探り出すこと。それが人類学の醍醐味だと小馬は言う。

「南米ではカソリック教国による植民地化が、いわば先住民の“内面の支配”を梃子に300年以上もかけてゆるやかにおこなわれました。ところが、アフリカでは19世紀後半から、雑多なキリスト教ミッションの手でそれが急激に進みました。キプシギス人のように文字を持たなかった社会に、政府・宗教・時間・市場などの識字的な諸制度が圧倒的な武力を背景として一気に入ってくる。小さな民族は、その堅い枠組の中に有無を言わせず取り込まれていったんですね。それを受け容れるのは、アフリカの人たちにとって、とても困難だったと思います」

その過程で、ヨーロッパの価値観を柔軟に内面化して近代化を担うエリートになっていく人々と、それに取り残された大多数の人々とに分断された。小馬の関心はむしろ、その取り残された人々の暮らしの細部にある。

「植民地支配を脱して独立したけれども、こんどは同じアフリカ人の苛烈な支配が始まる。そんな中で、キプシギス人は、牛を銀行のシステムのように互いにやり取りしながら、みんなで生きていくという仕組みを工夫したのです。牛をたくさん所有している彼らの生活は本来豊かなはずですが、植民地化によって現金なしでは生きていけない社会になってしまった。でも彼らは、それに即応して生きていくしかないのです。市場経済に待ったなしに組み込まれていく。その現場に私もいて、彼らと一緒に考え、彼らに寄り添って暮らしていく。おそらく私たちの祖先がかつて長い時間をかけてゆっくりくぐり抜けてきたことを濃縮して一気に経験しているのです。その様をまさに今目の前にしているわけですね。タイムマシンみたいなものなのですよ」

人類学とは自由を獲得すること

「文化を研究するとは、文化こそが自分を拘束し、自分を作り出しているものであることに気づき、それを相対化して自由を獲得すること」と小馬は語る。それゆえに、人類学とは人間をより広い可能性へと解放しようとするものだとも小馬は言う。キプシギス人についても、だからこんな言葉が出てくる。

「キプシギス人の社会には在来の統治者がいないかわりに、人類学で年齢組（エイジセット）と呼ばれる東アフリカ独特の社会システムがあるんです。一番下の組に属する若者は戦士階梯を占めます。一方、一番上の組に属する老人は、祖霊に近いので呪いなどの霊的な力を持ち、宗教的な役割を担って尊重され、かつ畏れられています。すべての人がえらくなくて、すべての人がえらい。様々な権力が誰かに独占されずに各世代の諸々の人々に分散されていて、中々よい社会かなと思いましたね。日本では年を取ると厄介者扱いされて、介護の産業化ばかりが言われますが、キプシギス人を見ていると、年を取って惚けていくのも、もしかしたら自然なよい生き方なのかもしれないと思えます。科学技術によって産業化され、医療化された文化を持つ社会にいては見えないもの、キプシギス人はそれに気づかせてくれるんです」

小馬は今年もキプシギス人の村へと旅立つ。村人たちが小馬のために何時の間にか建ててくれていた小さな家があるから、「旅費だけで済む」と小馬はいたずらっぽく笑う。無文字文化から識字制度へ、氏族社会から国家へ、互酬から資本主義へ。この深い断絶を乗り越えるための激変を生き抜いてきたキプシギス人。彼らと共に暮らし、彼らを通じて、隠された未知の普遍を見つけ出そうとする小馬の冒険はまだまだ続く。

親密な参与と観察を経てつくりあげられた、キプシギス人の様々な家族の家系図。○は女性、△は男性を、縦線は世代、横線は兄弟姉妹関係を表している。

キプシギス人が使うひょうたんの水筒。彼らはこれに生の牛乳や発酵させた牛乳を入れて持ち歩く。

SIDE STORIES

放屁論から河童まで 研究テーマは多彩を極める

小馬は放屁論やユーミンの歌詞論など様々な研究でも知られ、河童論を大きく展開した『田主丸町誌』は毎日出版文化賞を受賞。小馬は河童が世界各国の神話に登場する「死神」でもあったと言う。小馬の手がけるこれらの多彩なテーマは一見無関係に思えるが、実は「タブー」や「カテゴリーの裂け目」といった切り口をつくってみると、緊密につながっていると小馬は語る。

FEATURE

国境を越え、時空を旅する。少数民族・ヤオ族に見る、文字の力

中国から東南アジア大陸部諸地域に分布する少数民族「ヤオ族」。
グループが数百〜数千キロメートル離れて点在し、
何百年という時間を隔てても、
彼らは民族知識を保存・継承してきた。
時空を越えて彼らのアイデンティティを今に伝えたのは、
漢字で書かれた経典だった。

廣田 律子教授
経営学部　国際経営学科
少数民族・ヤオ族研究

文字によって文化を保存し、継承するヤオ族

ヤオ（ザオ）族と他称される人々は、中国からタイ、ベトナム、ラオス、ミャンマーにわたる東南アジアの大陸部に広く分布する少数民族で、中国には約270万人が居住する。中央集約的な統治システムを持たないにもかかわらず、数千キロメートル離れて点在し、数百年も断絶されているグループが、ほぼ同じ儀礼知識を継承している。この独特の民族性を支えているのが、民族内で受け継がれてきた、漢字で記された経典だ。

「かつて彼らは焼畑耕作を生業としていたので国境に関係なく山地を移動していました。中にはインドシナ難民として1970年代にアメリカに渡ったグループもいます。ヤオ族は移住先の他文化と共生しながらも自文化を継承してきた。相同の経典を受け継ぎ、儀礼知識のベースとしてきたからです。ヤオ族の経典は、時空を越えて民族を繋ぐアイデンティティの象徴なのです。私はこの独自の文化に惹かれ、研究を始めたのです」と、廣田律子は語る。民俗学者であり、フィールドワークを通し、ヤオ族の文化の保存・継承にも尽力している。

ヤオ族は移動する中で他のグループと出逢えば互いの経典を見せ合い、自らのグループが持っていないものがあれば祭司がそれらを書き写し、自らの経典に加えていく。1人の祭司が持つ経典の数は、100冊に及ぶこともあるという。

儀礼とは、民族知識のミュージカル

世代や地域の差を越え、ヤオ族が相同の民族知識を保存・継承するために重要な役割を

Ritsuko Hirota

1957年、千葉県生まれ。81年早稲田大学教育学部卒。86年慶應義塾大学文学研究科修士課程修了。博士（文学）。現在、神奈川大学経営学部国際経営学科教授。2008年から15年まで神奈川大学プロジェクト研究所ヤオ族文化研究所長、15年4月（一社）ヤオ族文化研究所設立（http://www.yaoken.org/）、所長に就任。主な著書に、『ミエン・ヤオの歌謡と儀礼』（編著、大学教育出版）、『中国民間祭祀芸能の研究』（風響社）など。

果たすのが、経典を使用して行われる儀礼だ。

年間で１人の祭司が70回もの儀礼を執り行う。儀礼の中で詠唱される代表的な経典が、ヤオ族の神話や歴史叙事が記されている『盤王大歌』だ。神話ではヤオ族の先祖が南京から移住の旅に出、海を船で渡ろうとした際大嵐に遭遇し、盤王（ビエンフン）に助けを求め願を掛けたところ無事に上陸できたとされる。盤王とは、ヤオ族にとっては救世主である。

儀礼の際、祭壇には盤王に豚の供物が捧げられ、神話的場面が再現されている。この祭壇の前で、時には謎掛けと謎解きの問答を挟みつつ、歌をうたうように『盤王大歌』が詠唱される。彼らの儀礼は、民族の伝承を再確認し、それらを五感で学習するための、いわばミュージカルなのだ。

「中国の漢族も儀礼に文書を使うことが多いが、ヤオ族のように一般民衆が経典を所有し、兼業的に儀礼を行うということはない。さらに崇拝されている神の中には道教の『三清神』も含まれるが、経典の内容は道教とは異なっており、ヤオ族の世界観や神観念に基づいた解釈が加えられ、民族宗教に近いものです」

学者ではないのかもしれません

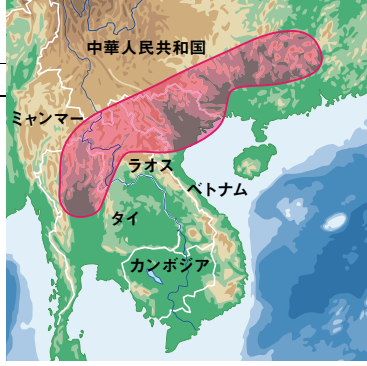
ヤオ族の間では、地域の差はあるものの今、次世代への儀礼文化の継承問題が浮上している。儀礼を執行する祭司になろうとする若者が減少してきたのだ。廣田は2008年に神奈川大学プロジェクト研究所ヤオ族文化研究所（2015年から一般社団法人ヤオ族文化研究所）を設立し、こうしたヤオ族の社会問題にも取り組んでいる。そのひとつが、ヤオ族のための“教科書づくり”だ。

ヤオ族の文化継承を支えるのは漢字学習だ。経典は旧字体の漢字で書かれているため特別な漢字学習が必要となる。さらに経典は日常使用される言語や漢語とは異なる音訓が付され、経文によって異なるリズムと旋律の節を付して発声され、歌唱法も非常に複雑である。廣田は儀礼の最中に経典がどのように読まれるのかを取材した音声情報、映像資料、文字情報を教材化し、それぞれの地域へと還元することを実践している。さらにヤオ族の儀礼において重要な役割を果たす「神画」の絵師を育てるための奨学金も有志で開設している。日常生活に困らず、修業に専念できる環境がなければ絵師は育たないのだという。

「もしかすると私は学者ではないのかもしれませんね。学者であれば、他民族の文化の継承に外部の人間が手を出すことに、難色を示しているかもしれない。それでも私はこの継承を真に支援したいのです。ヤオ族の儀礼文化は人類にとっての貴重な文化資源なのですから」

一見するとヤオ族は漢族の文化の影響下にあるように見えるが、彼らはその影響を、独自の文化・宗教観に昇華させたユニークな民族だ。それは私たち日本人にも通ずるところがあるという。

「日本人は漢字を自文化に採り入れたが、万葉仮名など、漢字の音を借用して日本語を表記しようとした。また漢字を操り自らの思想心情を記述してきた。同様にヤオ族も中国周辺に存続している民族であり、漢字を操ってきた。西洋化＝グローバル化もいいけれど、漢字を使って自らの思想を体系化してきた民族固有文化の素晴らしさを、ヤオ族に照らして見直すことも必要では？　と思うのです」



ヤオ族の分布。現在、中国には約270万人、タイに約4.5万人、ラオスに約２万人、ベトナムに約75万人が居住するほか、難民としてアメリカに約2.5万人が移住している。
（元地図の作製：（一社）ヤオ族文化研究所 岡本浩一）

儀礼では、祭壇がしつらえられ、壁に20軸以上の神画が飾られる。写真の３軸の神画には「三清神」が描かれており、中央が「元始天尊」、左が「道徳天尊」、右が「霊寶天尊」。（中国湖南省藍山県）

解体された豚は、船を模し、肝臓は船の碇、腸はロープ、脂肪は帆を、豚の頭の上に載せられた肉片は、大時化の際に船先で無事を祈るのに使ったハンカチを表現しているのだという。（中国湖南省藍山県）

SIDE STORIES

ヤオ族の神を描く絵師

ベトナムラオカイ省サパ県の絵師・趙承銀さん。法具の角笛と杖をもっている。絵師には絵を描くだけでなく経典を理解する深い教養が必要であり、祭司としても最高ランクでなければならないとされる。

民族知識が刻まれた7言4句

ベトナムゴクラク県の祭司、馮晃遊が持っていた経典『盤王大歌』の盤王の記述部分。経典は７言上下句が対となって構成されており、７言４句がひとつのまとまりになっている。

FEATURE

国際都市・上海から読み解く グローバル超大国・中国を支えたもの

東アジア経済圏において、重要な立ち位置を占める中国。
その中国最大の都市・上海は、いくつもの顔を持ち合わせる国際都市だ。
中国共産党が成立した革命都市であり、諸外国の租界が置かれた植民都市、
欧米人や日本人を含む、様々な人種が同居する多民族都市――。
上海の歴史をメディアから読み解くことで、
グローバル超大国・中国の“根”が見えてくる。

孫 安石 教授

外国語学部 中国語学科

中国近代史、上海都市史、東アジア租界史

Son An Suk

1965年、韓国・ソウル生まれ。1998年、東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士（学術）。北海道大学法学部専任講師を経て、現在、神奈川大学外国語学部教授。中国近現代史、上海史専攻。『近代中国都市案内集成』ほか、著書多数。

1842年、清朝（中国）とイギリスは南京条約に調印した。イギリスのアヘン貿易をめぐる摩擦に端を発したアヘン戦争は、イギリスによる清朝への最初の侵略戦争だった。

清朝は敗戦し、南京条約によって、広州、福州、厦門（アモイ）、寧波（ニンポー）そして上海が開港され、「租界」が設置された。租界とは、中国の領土でありながら、行政・司法権が欧米列強に属するという、中国に対して非常に不平等な条件で設置された、租借地区だ。欧米列強は中国における政治、経済、軍事活動の拠点として租界を機能させていた。

メディアに刻まれた、「東洋のパリ」の実像

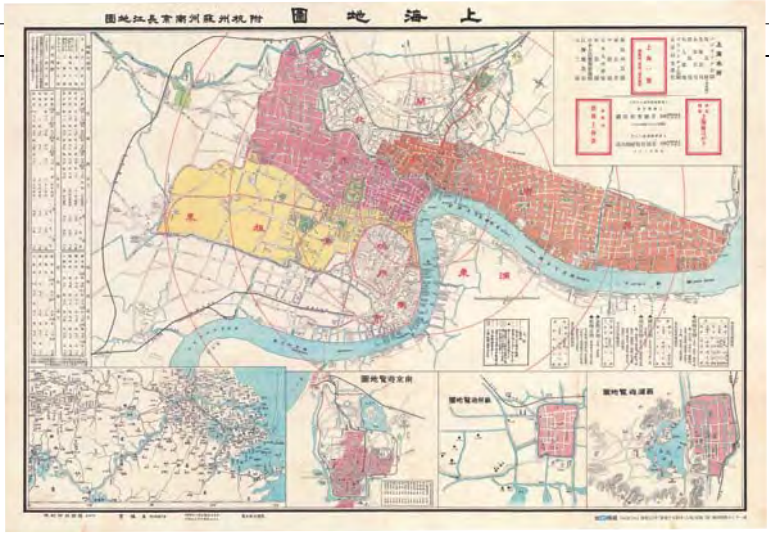
「上海を研究することは、中国、そして東アジアの今を紐解くこと」と話す孫安石は、上海に生まれたさまざまなメディアを研究してきた。

「1840年代以降、上海は中国最大の貿易港を持つ商工業都市へと発展をなし遂げました。それは同時に東アジア経済圏における巨大なメディア産業の誕生でもありました。開港以降、上海には、ビジネスチャンスを求める船と人々が世界中から集まりました。その富を左右したのが、新聞や雑誌など、上海の租界に誕生した各国のメディアによる情報だったのです」

上海にはフランスの租界、そしてイギリス、アメリカなどによる共同租界が設置され、互いが実権を握るために時には協力し、時には激しく対抗した。よく誤解されるのだが、上海には正式には日本租界は設定されなかった。日本がこの租界の運営に本格的に参加することになるのは1930年代以降の上海事変からの話である。

一方で、上海における利権を争う欧米諸国と日本は早い時期から英語とフランス語、日本語による活字メディアを持った。たとえば日本は、早くも1890年には、上海現地で日本語新聞『上海新報』を発行していたのだ。

欧米諸国は莫大な利益を生み出す、上海港の再開発や石油会社の参入、武力衝突などに常に目を光らせ、そこで展開される情報合戦は世界の政治経済の縮図でもあった。当時の



至誠堂『上海地図』(開新社印刷、1925年)。黄色い部分がフランス租界、ピンクとオレンジ色の部分が主にイギリス、アメリカによる共同租界だ。日本人が多く居住したのは、共同租界の中の虹口という地区であった。

各国の租界に誕生したメディアが中国の内政をどのように報じたかを知ることで、その縮図を読み解くこともできるという。

「『The North China Herald』という欧米系の新聞を見ていると、自国の租界の利益を守るためのジャーナリズムが展開されていたことがよく分かります。たとえば同紙が蒋介石率いる国民革命軍が北京の軍閥政府の打倒を目指した軍事行動＝“北伐”などを報じた際、その焦点は、国民革命軍の正義や中国の統一などの理想論ではなく、外国人の生命・財産の保護を言明した国民革命軍の蒋介石による声明文に向けられていました」

このような租界という独特の仕組みと不安定な政情の中にも、人々はたくましく日々の暮らしを営んだ。その華やかさは「冒険家の楽園」、「東洋のパリ」とすら呼ばれるほどであり、日本は享楽的で誘惑の多い上海を「魔都」と呼称した。

1920〜30年代、上海は中国の金融の中心地となるほどに発展する。ショービジネスが充実し、最新のハリウッド映画が封切られた。そして、世界中の富が集まる上海に住む中国人に向け、新しいライフスタイルを紹介する大衆雑誌が誕生する。1926年創刊の『良友』画報である。

「日本では中国と聞けば真っ先に思い出されるのが中国共産党と革命のイメージです。しかし、老百姓（一般市民の意）の日常は政治に明け暮れ革命に奔走したわけではなく、映画や演劇を観て楽しんだり、夏になればプールへ泳ぎに行ったりと、上海には充実した大衆文化と生活があったのです」

『良友』画報には当時の中国映画を代表する女優が表紙を飾り、ページを繰ればパーマを施術する美容院の紹介に、化粧品の広告、当時は珍しかったスポーツの提案、芸能人のゴシップなどがちりばめられている。

「ラジオ放送も始まり、アメリカで創業したレコードレーベル『コロムビアレコード』に匹敵する、フランスの『パテ』(Pathe）社が上海にレコードの時代を築きます。上海の1920年代は、まさに近代の大衆文化の原風景が広がっていく時代なのです」

進む租界の再評価

きらびやかな上海の繁栄は今も続いている。JETRO（日本貿易振興機構）によれば上海の2015年の域内総生産（GDP）は約２兆5000億元（日本円で約41兆円）にも昇る。

しかし国際都市・上海の繁栄の根幹にあるものこそ、不平等条約である南京条約によって設置された租界だ。それは中国人にとっては屈辱の歴史の象徴でもあった。

「中国において、租界というものは、中国固有の発展を阻害する象徴として考えられてきた。しかし今、中国では歴史解釈のどんでん返しが起きています。近年、租界こそが現在の中国の躍進を生んだのだという再評価が進んでいるのです」

上海は租界という屈辱と引き換えに、歴史の中で国際性の“種”を獲得した。その種は上海の歴史に根を張り、今やグローバル超大国・中国という巨木に成長している。

「誰も未来に先回りして今を生きることはできない。そんな歴史の“妙味”を、上海の過去のメディアは教えてくれるのかもしれません」

SIDE STORIES

古典と現代が共存する上海ミックスカルチャー

大衆雑誌『良友』画報の表紙を飾るのは、清代の北京で発達した古典劇「京劇」や、映画に出演する女優。1920-30年代の上海では伝統文化と国際的でモダンな現代文化が混在していた。

広告に記憶された大衆の日常

大衆雑誌『良友』画報の広告ページ。女性が脇にあてているものは、なんと今で言うところの、女性向けの「デオドラントスプレー」だ。

孫は韓国に生まれた研究者だ。毛沢東を研究すべく日本の東京大学大学院へ入学する。しかし論文の資料として担当教官に手渡された上海の商人の自伝が人生を変え、上海研究に没頭することになる。

LABS

研究所紹介 日本常民文化研究所

神奈川大学日本常民文化研究所は、民具、古文書の収集・整理、漁業史の研究などを通し、
常民の歴史を調査・研究する機関である。附置研究センター「非文字資料研究センター」、
共同利用・共同研究拠点「国際常民文化研究機構」を持ち、民俗文化を対象とした学際的な研究を推進している。

庶民の歴史、未来へ伝える。

本研究所は1921年に「日本近代資本主義の父」とよばれる渋沢栄一の孫にあたる渋沢敬三によって創設された「アチックミューゼアム」を前身としている。同氏はかつて日本銀行総裁、大蔵大臣をつとめた経済人でありながら、民俗学や漁業史を研究した稀代の文化人であった。その意志を引き継ぎ、1982年に神奈川大学に移管されてからも、「常民」つまり庶民の道具「民具」の資料を数多く収集し、庶民の生活文化における多方面の研究・調査を行ってきた。

本研究所の特徴である漁業史、海村史に関する充実した研究資料は、かつて渋沢氏が「なぜ日本は海に囲まれた国なのに、海の文化の研究がないのだろう」と疑問に思われたことを出発点としている。以降、理論先行ではなく、資料を学界に提供する役割を担うという渋沢氏の理念を今に受け継ぎ、瀬戸内海の歴史民俗、本研究所所蔵の漁場図が残されている地域全てを対象とした海域・海村の景観史に関する総合的研究などを行っている。

通史として記憶されるものは、偉人伝・合戦史が多いものだ。しかし、いかなる時代においても、社会の根底を支えてきたのは庶民である。民具や古文書を活用しながら、庶民の等身大の歴史を紐解き、後世へ広く伝えてゆくことが、私たち日本常民文化研究所の果たすべき役割だと考える。

1 2 3

1. 所長の田上繁。古文書の修復実習も行いながら、硬式野球部の部長もつとめる。2.コレクション展示の様子。船大工近藤友一郎氏による和船模型。 3.民具。魚を捕獲する罠、「筌（うけ）」という。

4.資料室には和船模型がところせましと並ぶ。5. 30万枚の「漁業制度資料」の筆写原稿が所蔵されている。 6. 資料『塩取立ニ関スル書』より、能登地方の塩田の見取り図。

4 5 6

言語を超える心の言葉「フィラー」が教えてくれること

「えーっと」「うーん」「なるほど」など、
私たちはコミュニケーションをする中で、
意味はないけれど、発している言葉がある。
それらの言葉は「フィラー」と呼ばれ、
私たちの会話の中に現れる、心の言葉なのだ。

注目の若手研究者
楊 洲
博士後期課程1年
外国語学研究科
中国言語文化専攻

フィラーを使わない人間はいない

フィラーは「雑音」「無意味語」とされ、言語教育では積極的に扱われることが少ない言葉です。しかし私たちからフィラーを取り去ると、きっと機械のような話し方しかできません。フィラーは人間固有の発音現象で、フィラーを話さない人は存在しません。

私がフィラーを研究しようと思ったきっかけは、中国を離れ、日本へ留学したことでした。「どのようなタイミングで『えーと』を使うのか？」など、最初は日本語をうまく話すためにフィラーを勉強していたのですが、その面白さから研究対象に選びました。

フィラーは、英語での先行研究が進んでいます。たとえば人が嘘をつくときには、フィラーが高頻度で使われるという報告をしている研究もあれば、人間とコミュニケーションするロボットにフィラーを発話するシステムを組み込み、会話を円滑にさせる研究も行われています。

私はまだ先行研究が少ない、日本語と中国語のフィラーの比較研究をしています。日本と中国は隣同士の国ですが、言葉はずいぶん違います。たとえば中国人は人を攻撃する場面では容赦なくストレートに話します。一方で、日本人は「No」と言わずに拒否を表現するような、曖昧さをコミュニケーションに活用します。対照的な特徴を持っているので、フィラーを比較すると面白いと考えています。

現在の研究では、日本人グループが中国人グループよりフィラーを多く使うことが明らかになっています。日本人の方が、対人関係を頭の中で整理するための時間を長くとっているということが言えるかもしれません。また、日本語を勉強する中国人はフィラーを使う頻度が高いことが分かっています。私と同様、日本語をうまく話したいことから生じる現象なのかもしれません。

これからも研究を進め、フィラーを通して見えてくる言語と心理の関係性を明らかにしたいと思っています。

フィラーの種類とその機能

発話境界	発話の切り出し
	発話の換言
	発話の修正
心的態度	感動の表現
	応答
	掛け声
談話調節	発話権維持
	話者交替
	時間稼ぎ
	注意喚起
	自発話確認
対人機能	和らげ
	ためらい
	沈黙回避

「ああ」「うーん」「えーと」などの他に、「なるほど」などの「相槌」もフィラーとして機能するという。

Yang Zhou
1989年、中国大連市に生まれる。2012年、大連外国語大学卒業、同年、長野大学環境ツーリズム学部卒業、2013年、桜美林大学大学院言語教育研究科日本語教育専攻修了。

フッガーとリスト。ドイツ経済史の巨人を追って

16世紀の大富豪フッガー。
そして19世紀の異色の経済学者リスト。
この二人の巨人に諸田は
研究者としての視線を注ぎ続けた。
ヨーロッパ経済史の大家である諸田の何を
この二人は魅了したのだろうか。

諸田 實 名誉教授

西洋経済史

Minoru Morota

1928年、静岡県生まれ。1952年東京大学経済学部卒業。同年、東京大学大学院（旧制）研究奨学生。経済学博士。福島大学経済学部講師、助教授を経て、1965年、神奈川大学経済学部教授。経済学部長、経済学研究科委員長などを歴任。現在、神奈川大学名誉教授。著書に『フッガー家の遺産』、『フリードリッヒ・リストと彼の時代―国民経済学の成立』、『晩年のフリードリッヒ・リスト―ドイツ関税同盟の進路』等がある。

終戦後に読んだこの２冊が諸田青年の人生を決めた。書籍はいずれも旧版。

終戦後、学問の自由の訪れに

そのかくしゃくとした姿、自らの研究について熱く語る口吻。来年には90歳の卒寿を迎えるとはとても思えない。ちなみに誕生年は神奈川大学の創立年と同じ1928年。諸田は、ヨーロッパ経済史、とくに16世紀と19世紀前半のドイツ経済史においては今なお日本における第一人者であり、神奈川大学の誇りなのである。

「旧制中学のときは戦時中ですから軍需工場で働いてばかり。中学を卒業して海軍兵学校に入ったのですが、すぐに終戦となりました。やがて大学に合格したのですが、家の事情から１年休学して実家のある静岡でアルバイトをしていました。その時に読んだ２冊の本に強い影響を受けたんですね。それで、大学が始まったら西洋経済史のゼミに入るんだと心に決めたのです」

その２冊とは『宗教改革と近代社会』（大塚久雄）と『近代の史的構造論』（松田智雄）である。歴史を経済の視点から読み解くそのダイナミズムに衝撃を受けるとともに、戦争が終わり、ようやく自由に学問ができるのだという喜びが、諸田青年の人生を決したのである。

戦争が必要とした大富豪

諸田は自身の仕事を語るとき、それを神奈川大学赴任以前の前期と、主に赴任後の後期とに分ける。前期のテーマは16世紀のドイツの初期資本主義であり、南ドイツの当時の大富豪ヤーコブ・フッガーをいわば史劇の主役に据えて分析、研究を行った。フッガーは持ち前の商才を発揮して鉱山業などで莫大な利益を上げ、それを資として王侯貴族ばかりか神聖ローマ皇帝にもお金を貸し付け、一代でヨーロッパ最大の富豪となった人物である。

「16世紀にフッガーのような巨大金融業者が登場し、活躍できた背景には戦争のあり方の変化がありました。それまでの騎士の戦争に替わり、傭兵隊が戦争の主役となりましたが、強い傭兵を得るには多額のお金が必要です。また、鉄砲と大砲の発達もあいまって、何万という傭兵を動員した、長期にわたる戦争が絶えず引き起こされることとなりました。大国や領主にとっては戦費の調達が死活問題となり、そのためにフッガーのような大金持ち

が必要とされたのですね」

16世紀は宗教改革の時代であり、敬虔なカトリック信者の顔と高利貸しの顔とをもつフッガーは、ルッターにとっては敵であった。宗教改革の主役はルッターであるが、その経済的背景を知るにはフッガーの研究が必要であろう。のちにドイツでフッゲライと呼ばれる救民施設を作ったフッガーの社会福祉の先駆としての面に出会うことになる。

リストとの出会い

諸田青年が影響を受けた二冊の書物の著者の一人、東京大学教授の松田智雄からの誘いを受け、19世紀ドイツ資本主義研究会に参加したのが、諸田が言う「後期」の端緒となる。

16世紀にはエリザベスⅠ世が鉱山技術者をドイツから呼び寄せたように、産業はドイツのほうが発達していた。ところが、18〜19世紀になるとイギリス、オランダ、フランスがヨーロッパ経済の三強の位置を占めるようになる。三十年戦争による国土の荒廃などから、イギリスとドイツの立場はいつの間にか逆転してしまったのである。

「19世紀初頭に、ウィーン会議によってドイツの新しい国境が定まり、大小39の国がドイツ内での主権を認められました。ところが、この39の国がそれぞれの国境で関税を取り始めた。これではドイツの商業にとってはすこぶる不都合なわけです。そこで関税を廃止し、経済統合を進めようという声が湧き起こり、1834年に関税同盟が発足する。これを基礎にしてドイツ経済は発展していくわけです。私はこの関税同盟の成立と発展をテーマに研究を進めていたのですが、鉄道建設などいろんな場面でフリードリッヒ・リストという名前がちょこちょこ出てくる。これが気になってしかたなかったんですね」

1999年、定年退職を迎えた諸田の最終講義で、彼はリストの研究に邁進することを宣言。その言葉の通りに、諸田はリスト研究に没頭した。

「リストは20代にアダム・スミスなどイギリス経済学を独学し、やがて大学で行政学を教えるのですが、アダム・スミスの唱える自由貿易によって経済は繁栄するという説に疑問を抱くようになります。現実は、洪水のように入ってくるイギリス製品によってドイツの工業がダメになっていっているではないかと」

理論と実際の間に橋を架ける

30代の時にリストはアメリカに追放され、そこで彼は企業家としての才能と行動力を発揮し、鉄道や炭鉱の事業で成功して財をなす。リストは言う。運河、鉄道を作り、保護関税の政策を取ることでアメリカはこんなにも急速に発展している。目の前で起きていることこそが経済の教科書ではないかと。

「リストはドイツのことが忘れられないんですね。そのままアメリカにいたら企業家として成功を収めたでしょうが、それをなげうってドイツに帰るのです。そしてアメリカでの経験を生かして、ライプツィヒでドイツ初の長距離鉄道の建設に尽力するなど、ドイツの発展のために働くのですね」

リストの主著『経済学の国民的体系』には、「すべての国民は自分の国に適した経済学を持つべきだ」というアメリカで宣言した彼の思想が込められている。15の外国語に翻訳され、古典となったこの書は、いまでもグローバル経済に疑問を持つ人々や途上国の人々の間で読まれ、影響を与えていると諸田は言う。

「リストは理論と実際の間に橋を架けようとした“行動の人”でした。私は彼がなぜそういう活動をしようとしたのか、ドイツの経済発展にとってどういう重要な働きをしたのかを詳らかにしようと努めてきました。日本でも若い人たちの間でリストがもっと読まれたらと思います」

諸田の自宅には、ドイツでも全部読み通した者はいないのではと言われる10巻12冊のリスト全集と、晩年に彼が一人で編集した4000ページにわたる『関税同盟新聞』があると言う。「図書館に通って研究する力はもうないが、炬燵(こたつ)の中で読むものには困らない」と諸田は嬉しそうに笑った。

自著の『フリードリッヒ・リストと彼の時代―国民経済学の成立』と『晩年のフリードリッヒ・リスト―ドイツ関税同盟の進路』。

リストの生涯は1943年にドイツで映画化もされた。画面中央やや右の女性とともに立つ男性がリスト役。映画のタイトルは『Der Unendliche Weg』で『終わりなき道』とでも訳せようか。

フッガーの足跡を求めて

1974年から在外研究員として当時の西ドイツのテュービンゲン大学に出張したときには、アウクスブルクに残る、フッガーが設立した救民施設フッゲライ（写真）や、各地に残るフッガー家の城の調査研究をしている。フッゲライには、敬虔なカトリック信者であり貧しい労働者であれば非常に安価な家賃で住むことができた。

表紙について

小馬教授の大量のフィールドノート群の一部です。研究対象の土地に住み込み、暮らしの万般を共にして経験し、観察した事柄を細大漏らさず書き記します。でも、それはゆっくりと「親密な心の通い合い」(rapport) を育んだ教授と土地の人々の間にのみ存在し、他の人の目に触れることはありません。

次に小馬教授は、人々のプライバシーを固く守りながら、他の研究者がそれを使って全く別の解釈もできる程の客観性と実証性を備えた「民族誌」へとその記録を練り上げます。文化人類学は、こうした「民族誌」を基に、人間の社会や文化に関する一般性の高い論理を発見しようとする学問です。

ノートとペン。生物学者にとっての顕微鏡や天文学者にとっての天体望遠鏡と同じく、文化人類学者には、肌身に親しいとても大切な道具なのです。

PROUD BLUE

編集発行／
神奈川大学研究支援部、広報部、学長室

CD／黒澤加奈子(図書印刷)
AD／細山田光宣(細山田デザイン)
D／川口匠(細山田デザイン)
TEXT／森旭彦、太田穣
PH／岡村隆広
PD／山宮伸之、長濱紀子(図書印刷)

問い合わせ先
045-481-5661(代)
proud-blue@kanagawa-u.ac.jp